

五 盤珪禪師と明徳の修行

愈我身の一大事と氣付いたら、矢も楯も堪らない程に、懸命に努めねばならぬ筈である。「辛抱しやんせきりくしやんと、かけた襷のきれるほど」直指人心見性成佛と、手ツ取り早いやうなる教の禪宗も、その堂奥に達するには、一通や二通ではゆかぬと見えて、古來高僧方の此が爲に、長年月と重辛勞を費やされたることは、殆ど意想外の事が多くあります。近くは、大石良雄なども參じて大事を明めたと云ふ、播州網干の龍門寺の盤珪禪師の如き躬らその修禪當時を回想して、斯様に云はれてあります。

身共が漸く成人しまして、母が大學の素讀を習はせまして、大學を讀みます時、大學之道は在明明徳と、白す所に至りまして、此明徳と云ふことが、疑はしく御座つて合點が行かず、濟みませいで、久しうが間、此の明徳と云ふものを、疑ひましたわいの。儒者衆に問ひますれば、どの儒者も知りませぬ。或儒者の白すは、斯様な六づかしい事は、善く禪僧の知つて居るものぢやほどに、禪僧に従つて御問ひやれ、明徳の事は、我等が家の書に出てあつて、朝暮口では文字の道理をもよく言へども、明徳と言ふものは、何の様な物が明徳やら、審らかに我等は知らぬと云ひまして、埒があきませなんだゆゑに、どうがなと存じましたなれど、其時分は爰許に禪宗は御座らず聞かうやうもなし。どうぞして此明徳の埒を明けまして、年よつた我母に知らせて、死なせたいことかなと存じて、身共が知るよりも先づ、年よつた今死ぬるもしらぬ母に、知らせたう御座つて、茲な講釋、彼處の說法があると白せば、そのまゝ走り出で聞きて、母の爲に尊いことを聞きまして、戻りましては、又母に言うて聞かせますれども、彼の明徳の埒が明きませぬ。

それから思ひよりまして、さる禪宗の和尙に參じて、明徳を聞きまして御

座れば、和尚のおしやりまするには、明徳が知りたくば座禪せよ。座禪せば明徳が知れる、とのことで御座つたによりまして、又直ぐに座禪にとりかゝりまして、そこな山へ入りましては、七日も十日も物を食べず、こゝな山へ入りては、尖つた岩の上に着物を引きまくつて、直に尻に岩をつけて座を組むが最後、命を失ふことも顧みせず、自然とこけて落ちるまで、岩を起つこともせず、食物は誰も持つて来て呉れやうは御座らず、幾日もそれ故、物を食べなんだことが多う御座つたれども、只偏に明徳の埒が明けたさに、饑いことも關ひませず、苦にもなりません。でもまだ明徳の埒が明きませなんだわい。

それよりして故郷へ歸り、庵を結びて安居、晝夜念佛三昧で居てみたことも御座り、色々とあがきて見ましても、彼の明徳の埒が明きませなんだわい。その如く餘り身命を惜まず五體を摧きまして、後には尻が破れて、座するに殊の外難儀しましたわい。されど今思ひますれば、其時は未だ上根に御座つた。それで痛みます故しやうことなさに、杉原を一帖ほど宛、尻の下に取りかへ敷きまして、座しましたが、其如くして座しましたれども、中々尻よりひたもの血が出まして、痛みまして座しにくう御座つた所で、綿を敷いて座することも御座つたわいの。

何かどの數年の疲れが、後に一度に出まして、大病者になりましたれども明徳のことが濟みませいで、只久しうが間、明徳にかゝつて、骨折つて難儀しましたわいの。それから病氣が段々と重りまして、身が弱つて、後には痰を吐きますれば、親指の頭ほどの血痰が固まりました、ころりくと丸くなつて、出ましたわいの。或時痰を壁へ吐きかけて見ましたれば、ころりとして、落つる程のことで御座つたわいの。其時皆白すは、それではなるまい

ほどに、庵居あんきよして養生やうじやうせいと云いふにつきまして、皆みなの者ものに任まかせて、庵居あんきよして僕しもへひとり一人ひとりつかつて、煩わづらうて居をりましたが、やうく病やまひがつまりまして、ひつしりと七日程かほじも食しよくが止とまつて、重湯おもゆより外ほかの物ものは咽のどへ通とほりませいで、それ故ゆゑに最早はやしぬ死かくじる覺悟かくごで居ありました。其時そのとき思おもひますは、はれやれ是非せひもない、別べつに残のこり多おほい事ことは無なけれども、只ただ平生へいぜいの願望ぐわんもうじやうじゆ成就じゆじゆせずして、死しぬる事ことかなとばかり思おもふて居ありました。

折をりふし一切さいの事ことが不生ふしやうで調ととのふものを、さて今いままで知しらないで、無駄むだ骨折ほねをつたことかなと思おもひつきまして、やうく従前じゆぜんの非ひを知しつたことで、御座ござつたわいの。それからして、氣きははつきりとしませす。悦よろこばしう御座おざつて、食くひきげんが出来でました程ほどに、僕しもへを呼よびまして、粥かゆを食くふ程ほどにこしらへよと白まをしたれば、今いままで死しにかゝつて居あた身み供どもが、不思議ふしぎなことを云いふよと、僕しもへも思おもひましたさうに御座ござつたが。然しかれども、いかう悦よろこびまして、さて嬉うれしやと白まをして其儘そのまゝいそぎふためき、粥かゆをこしらへ煮にて、僕しもへも少すこしなりとも早はやう食くはさうと致いたして、ろくにまだ煮にもせぬ程ほどに、ぱてつく粥かゆを食くはせましたが、それでも關かまはずに、先まづ三杯ばい食たべたれども、あたりも致いたさず、それより結句けつくだん段々と、日増ひましに快氣くわいきしまして、今けふ日まで長ながらへ居あますこと御座ござるわい。